

**尹 熙淑 (YUN Hui-suk)**

早稲田大学生命医療工学研究所講師／工学博士
先端科学・健康医療融合研究機構
分子医療ドメイン コアメンバー

1999年に東京大学大学院工学系研究科材料学専攻に入学し、修士課程・博士課程を得て、2004年に博士(工学)を取得。同時に2001-2004年産業技術総合研究所研究員を経て、2004年9月から現職。

「偶然を装った必然」**はじめに**

できれば避けたいものは、より早く順番が回ってくるような気がする。活字にもっとも弱い私は、他の研究者が書いている「研究者の横顔」を読むたびに、原稿の依頼が来たらどのような言い訳でその難関から逃げるかを想像していたが、実際に順番が回ってきたら気が変わった。いやなものは先にやっ飛ばしておこうと……。しかし、何について語れば良いのかわからない。昔の写真は母国においてきたアルバムの中に眠っている。臨機応変。手元にある写真で今の私があるまでを思いつくまま書いてみる。

全ての始まりは家庭環境

私は4人兄弟の3番目で生まれた。会社員である側ら、韓国の国技であるテグオンドの館長を勤めていた父は、常に厳格な人で、例え子供であっても時間と約束を守らないことは絶対許すことがなかった。その反面、母は父の厳しさに文句一つ言わずに子供達の前ではいつも父を立て、子供達には常に笑顔で接するやさしい人であった。しかし、姉や兄が過ちをする度に、子供の代わりに母が怒られていることは、幼いながら私には納得いかないことであった。それで、母が怒られないよう、家庭での私は自分を抑え、常に良い娘を演じていた。結果、私は甘えより先に我慢を覚えた。それから、人の些細な気分の変化も敏感に感じるようになった。家庭は常に男性を中心に回っていたので、口には出さないものの沢山の悔しい思いもした。そのすべての我慢と不満が家庭外の生活で反動として現れた。小学生の時から、学校では誰よりも活発で、男子学生には例え肉体的な喧嘩であっても負けることはなかった。いや、負けたくなかった。私が理工学部に進学したのも男子に負けたくないとの不純な動機からだ(もちろん今はそんなことは考えていない)。大学の面接で‘なぜ女性が材料工学を専門に選んだのか’と聞かれた時、‘女性だから選んではいけない理由でもありますか’と反問をして面接官を困らせたのを覚えている。今考えるとずいぶんと生意気な答えであるが……。

なぜか遠い日本

十数年前の韓国では、男性と同じ条件では女性が工学系で良いポジションを得ることは難しかった。より優秀でよい条件を備えないと。そのため私は日本かアメリカへの留学を決心し大学2年生の時から語学の勉強を始めた。特に初めて接する日本語にははまったと言って良いほど一生懸命だった。映画やドラマの台詞、歌の歌詞をすべて聴きとって暗記したり、日記をはじめとするすべての言葉の記録を日本語で書いたり、一日10時間以上に及ぶ勉強をした覚えがある。そのころの睡眠時間は長くて3時間。朝7時からの授業しかなかった語学学校の授業を6時からにしてもらい、9時からの大学の授業の前に数時間レッスンを受けたりしていた。しかし、一生懸命だけでは夢は叶わない。大学3年生のころ、K大学に交換学生になれる試験があると聞き、準備を始めた。しかし、その時母が病気で倒れ、試験は諦めざるを得なかった。大学の卒業を迎えた頃、もう一度日本への留学に挑戦したく、日本の大学院への進学を準備した。しかし、その時父の会社が倒産し、留学という言葉を出し出すことすらできなかった。妥協が嫌だった私は目標としていた留学ができないなら、中道半端な道より、きっぱり専攻を諦めたほうが良いと思った。よって日本への道も途絶えた。



合併したS社とU社のガイド(上)
および同行通訳(下)中の私 (1995年)

チャンスはつかむ人のもの

気持ちの整理が付かず、大学卒業後しばらくはアメリカに住む姉のところで過ごしていた。その時姉が私に言ってくれた言葉は今も大事にしている。‘目の前にチャンスが来た時それがつかめる人は、それがチャンスであると気づく人とチャンスをつかむために常に準備していた人だけである’と。せっかくチャンスがあってもそれを物にする能力がなければ何もはじまらないから。チャンスは突然やってきた。小学校以来連絡がなかった友達からアメリカに電話が入った。「あなたが日本語ができると聞いたけど、通訳をやってみないか」と。未経験な私にあんまりにも大きな仕事が突然入ってきたので呆然としていたが、すぐ承諾をした。次の日には韓国行きの飛行機に乗っていた。その時の通訳は私にとって非常に



博士学位授与式の後同期と (2004年)

大事な経験であった。家庭教育で鍛えられた正確な行動と細かな気配り、留学のために身につけた日本語、それがすべて無駄なことではなかったことに気づいた。通訳をしながら私の日本語がまだまだ微力であると感じた。それで通訳士を止め、勉強と教育両方ができる講師になった。日本語を専攻していない私が講師になれただけでも驚いたのに、半年後には院長から学校の室長(副院長)になってくれとの提案があり、迷わずそれをものにした。語学の教育や講師達の管理、企業とのやりとりなど、仕事は非常に楽しかった。しかし、日本に行ったことがないことにずっとハンディーを感じた。それで、ずっと反対していた父を説得し、

せっかくの良いポジションも辞め、その間稼いだお金を持って日本へ渡り、ビジネス学校に入った。知人もなく、お金も十分ではない不安な出発だったが、まるですべて準備されていた様に色々な人の助けを得て、大きな苦勞なく日本での生活が始められた。卒業後は帰国して同時通訳の大学院に入る計画だった。しかし、卒業を迎えたころ偶然、知人から東大の留学生を紹介された。偶然なのか必然なのか、その人は材料学を専攻している人だった。心に潜めていた専攻への執着が顔を出してしまった。そんな未練がましい私を諦めさせるため、東大受験を決めた。失敗したら未練が捨てられるだろうと。しかし、合格し、日本滞在2年の予定が10年もの年月が立ち、現在の私がいる。

家族と趣味

10年もの間、色々な変化があった。まず、ずっと恋愛に興味がなく、大学院入学を心に決めた瞬間から結婚を諦めていた私が修士1年の冬に結婚をした。同じく留学生で2004年3月26日に博士号を同時に取得した。私は東大で、彼は早大で。1人で突っ走ってきた私が結婚生活に慣れるには色々な変化が必要であった。正確な性格もこの時だけは役に立たない。時には妥協というものも必要になった。今考えると結婚により、ずいぶんと変わった気がする。良い所ばかりではないが、少しは肩の力も抜けた。忙しさから子供はまだいない。しかし、犬、ハムスター、飛びネズミ、熱帯魚、海水魚とバライディーに富んだ家族ができた。今は亡き子も一緒の子もいるが、彼らにはずいぶんと助けられた。



私が愛するもの。左上からヒロ、アキ、ティミ、トミ、それから海水魚水槽

趣味という名のものはあんまりない。母国にいたころはコーラスやクラシックギター、ピアノなど色々な音楽活動をしていたが、日本ではしていない。好きなことは写真の被写体になること、旅行、ワンちゃん達の洋服作りなどがあるが、趣味と言えるほどではない。すべて気が向いた時、気が済むまでやっているだけ。



シートカットの私(1994年、左)、タイ旅行中に旦那と(2002年、中)、自作の着物(右)。

おわりに

研究と離れた話をだらだらとつづって見た。読み返すと削除したくなる部分が多い気がするので、添削なしにこのまま提出をする。50代になって自伝が書けるような人生にしたいのが夢だが、30代の私にはまだ書けるものは少ない。もっと色々な経験をし、ベストセラーになれるような人生をこれから歩んでいきたい。